

病害虫発生予察情報(1月予報)

令和7年12月23日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病	発生量：並 (発病株率 9.7%)	12月上中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 3.8%)	12月上中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	黄化葉巻病	発生量：やや少 (発病株率 2.2%)	12月上中旬発生量：少 (-) コナジラミ類発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+)
	コナジラミ類	発生量：並 (寄生株率 11.4%)	12月上中旬発生量：やや少 (-) 防除員からの報告：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
だいこん	白さび病	発生量：やや少 (発病株率 7.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：やや少 (発病株率 2.1%) アブラムシ類発生量：多 (寄生株率 10.3%)	12月中旬発生量 モザイク病：少(発生なし) (-) アブラムシ類：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (-)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) プロモントラップ誘殺数：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (±)
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率：14.3%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (±)
キャベツ	菌核病	発生量：やや少	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
たまねぎ	灰色腐敗病	発生量：やや多 (1月平年発生なし)	12月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	腐敗病	発生量：やや少 (発病株率 1.1%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	ネギアザミウマ	発生量：やや多 (寄生株率 25.6%)	12月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (-)

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均平年値)	予報の根拠
ねぎ (白ねぎ)	さび病	発生量：やや少	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	べと病	発生量：やや少	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：多い (+)
	ネギアザミウマ	発生量：多	12月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (-)
レタス (非結球レタスを除く)	べと病	発生量：やや少 (発病株率 1.5%)	12月上旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	斑点細菌病	発生量：並 (発病株率 2.0%)	12月上旬発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
いちご	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 0.5%)	12月上中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	うどんこ病	発生量：多 (発病株率 1.0%)	12月上中旬発生量：多 (+) 防除員からの報告：やや多～多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	炭疽病	発生量：やや少 (発病株率 1.3%)	12月上中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 2.2%)	12月上中旬発生量：多 (+) 防除員からの報告：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 1.6%)	12月上中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	ハダニ類	発生量：並 ただし、中遠：多 (寄生株率 14.2%)	12月上中旬発生量：やや少 (-) ただし、中遠：多 (+) 防除員からの報告：やや多～多 (+) 気象予報：気温：高い (+)

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+/-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこち
らで検索！



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準
<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害
虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo_shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並～やや遅い。

●葉かび病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は1.8%（平年12.1%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、20～25℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。このため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い発生に注意する。
- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気に努め、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去し、適切に処分する。特に多発ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率2.8%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・先枯れした葉や発病した果実、茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・多湿にならないように換気に努め、過度のかん水を避ける。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は0.9%（平年2.5%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類は、平均寄生株率は10.2%（平年13.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの発生を助長する。このため、本病の感染も助長される。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は10.2%（平年13.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・病害虫防除員からは、4名中2名から本種の発生が「やや多い」との報告があった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・葉裏における成幼虫の寄生状況を観察するとともに、黄色粘着板における誘殺数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

＜生育の概況＞

生育は平年並。

●白さび病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率2.5%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10°C程度である）。

防除対策

- ・発病残さは翌年の伝染源となるため、ほ場に放置しない。
- ・排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発生が確認されなかった（平年発病株率1.7%）。
- ・本病の媒介虫であるアブラムシ類は、平均寄生株率16.9%（平年6.3%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病を媒介するアブラムシ類の発生を特には助長しない。ただし、アブラムシ類の平均寄生株率が平年より高いため、本病の発生が助長される。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・発病株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、寄生が確認されなかった（平年寄生株率0.8%）。
- ・11月21日～12月15日までのフェロモントラップによる本種の誘殺数は、平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・発生が多い場合は、薬剤を葉裏にかかるように散布する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、寄生が確認されなかった（平年寄生株率5.7%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・上位葉に白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

＜生育の概況＞

収穫期に入っていて、生育は平年並～10日ほど早い。

●菌核病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率0.4%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、今後収穫予定のほ場では気象情報を確認し、降雨が予想される場合は発生に注意する。
- ・薬剤防除の際は、予防散布や発生初期の散布を徹底する。複数回散布する場合は、薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・春期収穫の作型では、過剰な施肥や肥料の遅効は本病の発生を助長するため、適切な施肥管理に努める。
- ・例年発生が見られるほ場は、鱗茎への感染を予防するため、薬剤による防除を実施する。なお、薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・罹病球やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●腐敗病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率0.7%）。
- ・病原細菌の生育適温は20~23°Cで、暴風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は細菌病であり、暴風雨や凍霜害による傷口から侵入するため、暴風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ネギアザミウマの食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
- ・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は31.6%（平年25.7%）と平年よりやや多かった。被害を示す被害度は4.4（平年17.2）と平年よりも低かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年1月は特に防除の必要はないが、温かい日が続くと増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【ねぎ（白ねぎ）】

＜生育の概況＞

収穫は平年よりも遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率0.9%）。
- ・本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、今後収穫予定のほ場では気象情報を確認し、降雨が予想される場合は発生に注意する。
- ・薬剤防除の際は、予防散布や発生初期の散布を徹底する。なお、薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●べと病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・本病は、気温15～20℃で降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、今後収穫予定のほ場では気象情報を確認し、降雨が予想される場合は発生に注意する。
- ・薬剤防除の際は、予防散布や発生初期の散布を徹底する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は17.6%（平年8.8%）と平年より多かった。被害を示す被害度は20.1（平年13.1）と平年よりも高かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はない。今後収穫予定のほ場では、温かい日が続くと増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育は平年よりやや遅い傾向。

●ベと病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.9%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（病原菌の生育適温は10～15°Cで、多湿を好む）。
- ・トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

- ・初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・罹病残さは、ほ場外に適切に処分する。
- ・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年0.7%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げることが重要である。
- ・降雨が続くときや初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

＜その他の病害虫＞

●菌核病

- ・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年0.3%）と平年並であった。
- ・発病後の薬剤散布では効果が劣るため、常発地では定植後30～40日で、本葉が8～10枚程度出葉した頃を目安として予防散布を行う。
- ・発病株には菌核が形成されて伝染源となるので、ほ場に放置せず速やかに撤去する。

【いちご】

＜生育の概況＞

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年よりやや遅い～遅い。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・12月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.3%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は気温が20°C前後、多湿条件下で多発するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
- ・曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は3.1%（平年1.1%）と平年より多かった。
- ・地域別では、東部は発生なし（平年1.4%）、中部は0.4%（平年0.9%）、中遠は9.0%（平年1.1%）と中遠での発生が多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について3名が「やや多い」または「多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20°C前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、予防に努める。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。また、結実や収穫による草勢の衰えや、窒素肥料の過多も発生を助長するため、適切な栽培管理を行う。
- ・発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため、ハウス内に放置しない。速やかに除去し、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・多発すると防除が困難になる。ほ場をよく観察し、発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。その後も1週間程度の間隔で薬剤散布を行い、初期防除を徹底する。
- ・薬剤防除については、[「静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」](#)を参照する。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号（いちご うどんこ病）」](#)も参照する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.3%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病の生育適温は28°C前後であり、高温・多湿条件下で発生しやすい。
- ・発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐ら

せるなど、適切に処理を行ってから処分する。

- ・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前には場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。
- ・薬剤感受性の低下が疑われる剤（MBC殺菌剤（FRAC: 1）、QoI殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤耐性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～11）を使用する。
- ・厳冬期も病徵は緩やかに進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が急速に進展する場合がある。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.8%（平年2.7%）と平年より多かった。
- ・地域別では、東部で2.2%（平年0.7%）、中部で11.4%（平年6.5%）、中遠で3.8%（平年1.0%）と、県全域において発生が平年より多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について3名が「やや多い」と回答した。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・既に施設内に侵入した個体が増殖し、果実被害の発生が予想されるため注意する。

防除対策

- ・本県のいちごにおけるアザミウマ類の主要種はヒラズハナアザミウマであり、本種は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要なない花は摘み取った後、ほ場外に持ち出し、ビニール袋で密閉するなどして適切に処分する。
- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため開花前に除去する。なお、開花後の雑草等の除去は、本虫の飛来を助長するため注意する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・薬剤防除については、[「静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」](#)を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちごアザミウマ類）」](#)も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.5%（平年2.8%）と平年よりやや多かった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・冬期は施設内への侵入は少なくなるが、新葉等における寄生状況を観察し、初期防除に努める。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は13.3%（平年18.1%）と平年よりやや少なかった。
- ・ただし、地域別では、東部で4.4%（平年10.4%）、中部で5.2%（平年21.8%）、中遠で30.4%（平年

22.0%) と、中遠での発生が平年より多かった。

- ・いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」または「多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和7年12月18日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 12月20日から1月19日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
	降水量	降水量は、多い確率50%です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率60%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	20	30	50
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

1か月 : 12月20日(土)～1月19日(月)

1週目 : 12月20日(土)～12月26日(金)

2週目 : 12月27日(土)～1月2日(金)

3～4週目 : 1月3日(土)～1月16日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>